



# 私のひとりごと

## 「つじつまが合う様になってくる」

この春から、美浜町小学校再編に伴い私の住んでいる地区の小学校も廃校となった。村の中心の小高い山の上にあり、かつては200戸足らずの集落で私の同級生でも18名、全校で100名程の人数で賑わっていた。私が4～5歳の頃と記憶するが、学校建設のための整地を自衛隊が行っていた。ブルドーザーなどの車両を見るのが初めてで、きっと目を丸くして見ていたのであろう……。自衛隊員の人々が作業中にも関わらずブルドーザーの運転席の横に乗せて遊んでくれた思い出がある。今にして思えば、“のどか？”な時代であったように思う。

時は流れ、先日廃校になった小学校の先生が尋ねて来られた。「え！何の用？」と驚いたが、廃校に伴い20年以上に渡り校長室に飾られていた次男の絵を返しに来られたと言う。その絵は校内写生大会で入選した絵で、親が言うのもなんだが、繊細で明るく描かれていた。さらに驚いた事に、私自身次男の絵を見るのが初めてであった。普通の親なら子供の描いた絵は、何度となく見る機会があるはずであるが私には無く、どうやら普通の親ではなかったように思われる。思い返せば若かりし頃は休日など殆ど無く、仕事漬けの毎日であった。たまの日曜日に家に居ると、「今日はお父さんが居る。」と子供がふれまわった？そうである。よくよく考えてみると、子供と遊びに行った記憶も殆ど無く、次男などは抱いてあやした記憶は一切無い。朝5時ごろから真夜中までが私の定時で、現場で朝を向かえる事も珍しくなかった。この話を聞くとさぞかし苦労であったろうなあとと思われるかもしれないが、実のところはそうではなく、仕事が面白かったのである。或る所に良い家があると聞けば、直ぐに見に行き同じ様な物を作ってみたい、日光東照宮の「眠り猫」で有名な江戸時代の



20年の月日は感慨深いです。。

名工「左甚五郎」の生き方に刺激を受け、木材に彫刻を施してみたりと全く好き勝手な仕事をしていた訳だ。当然の如くお金儲けには全くなりならず、入っているかいのないかわからない様な給料袋を、家内に渡すのが常であった。家内いわく4人の育ち盛りの子供を抱え、朝目が覚めた瞬間からお金の心配をして一日が始まったと言う。また子供たちもお金が無い事を知ってか、給食費等の集金が有ることを親にも言えず、「忘れた。」と言うのが常であったと聞く。その様な状況であるにも関わらず見て見ぬふりをして、正確には殆ど家族の顔を見ていないので気が付かない状況で、好きな仕事に没頭した毎日であった。まるで落語の話に出てくる様な事を、地で行った若かりし頃である。勿論反省していない訳ではない。山のように反省もし後悔もするが、今更どうにか成るものでもなく……。今、その次男の絵は私の寝室に飾られているが、それがせめてもの罪滅ぼしか……。

家族に一切、手をかけずに通って来た私だが、現在に至っては家族みんなが同じ仕事をしている。子供達にはそれぞれの家庭もあるが、一日の大半を皆で一緒に過ごし、家内に至っては24時間気を使ったり使わなかったりしながら一緒に過ごす。また、表向きは、この歳になっても家族の面倒を見ているように見えている。この現実を思う時、人生というものには実につじつまが合うようになってきているものだと思う……。

ではまた来月もお会いしましょう。  
今月も最後まで読んでいただき……

あーがしう  
ございました!!

